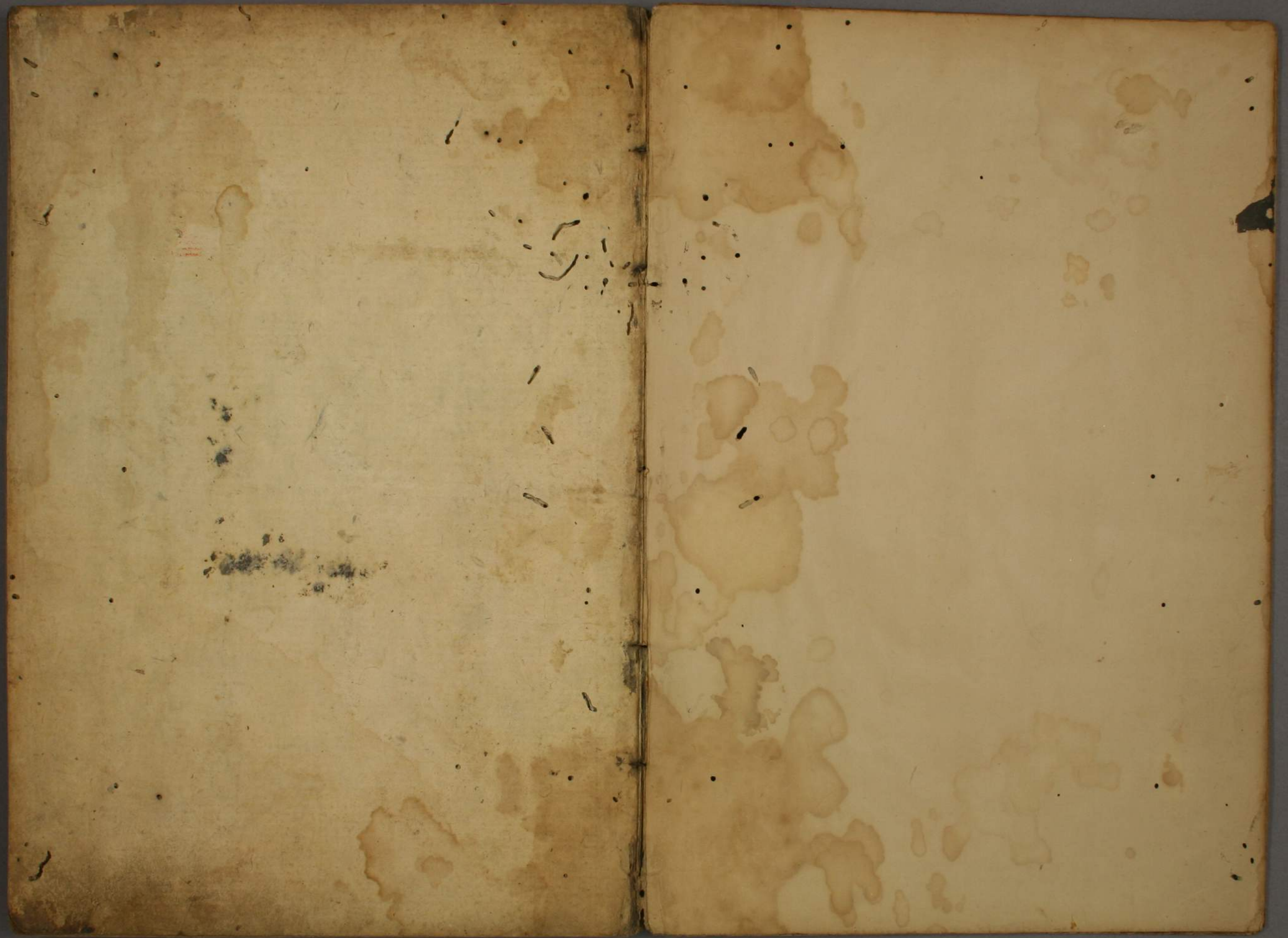




特別
6082





門
6082
卷

詞花和歌集卷一

春

一 御下院の御百を請はるるに

春の心とて

大和の道房

此の心とて春の心とて

寛和三年の御新合の御心とて

藤原惟成

御心とて春の心とて

天徳四年の御新合

平重盛

御心とて

御心とて

故郷を去るもつらき物のみさる原と霞行
初めしつらきときて 道命法師

白雲の秋のつらきもの初をわびふか
類不記 曾根好忠

市子とてつらきもの母さき春の初太公
次泉院老官とてつらきもの母を詩はて

つらきものつらきもの 深重く

長野のつらきもの初之つらきものつらきもの
つらきものつらきものつらきものつらきもの

つらきものつらきもの 赤深丸門

つらきものつらきものつらきものつらきもの
梅花遠重とてつらきもの 深時鑑

つらきものつらきものつらきものつらきもの
梅花とてつらきもの 右長兼持

つらきものつらきものつらきものつらきもの
梅花とてつらきものつらきもの 後思法師

つらきものつらきものつらきものつらきもの
つらきものつらきものつらきものつらきもの 僧都見雅

いかにふらふらとよき春のめづらしき花を
天徳元年の春新合柳と平重盛

花の系もつらう春柳と吹心より春の心
鶴た天と吹の春合 深雪遠

いかに氷もつらう春の心しとよき春の柳系
巨木の柳とつらう 深道所

故の湯子の柳もつらうとつらう春の柳系
影不和 深道所

太ふ木とつらう柳もつらうとつらう春の柳系
東林藤大政天と吹の春合

いかに春もつらう春の心しとよき春の柳系
康賀毎

いかに春もつらう春の心しとよき春の柳系
康賀毎

いかに春もつらう春の心しとよき春の柳系
康賀毎

いかに春もつらう春の心しとよき春の柳系
康賀毎

いかに春もつらう春の心しとよき春の柳系
康賀毎

日弁合上

一宮記傳

物部守麻呂の事

大和之連房

守麻呂の事

大和守麻呂の事

守麻呂の事

守麻呂の事

守麻呂の事

守麻呂の事

守麻呂の事

守麻呂の事

守麻呂の事

守麻呂の事

守麻呂の事

守麻呂の事

守麻呂の事

守麻呂の事

守麻呂の事

巨のつれ教の原と橋の古のふのふのわが
新院の位下とて自ら請うるに上り

近中教長

高きふ命わんは橋のつれはなとゆて

人わんころとて橋のつれとてわて

以登手

橋のつれとてわてゆとてまのつれとてわ

題下和

道命法師

ままのつれとてわてゆとてまのつれとてわ

六

ゆつれとてわ

贈たふ書

故郷のつれとてわてゆとてまのつれとてわ

深志寺

まのつれとてわてゆとてまのつれとてわ

橋のつれとてわ

藤原元真

橋のつれとてわてゆとてまのつれとてわ

天徳三年由良齋合 大中長龍道

橋のつれとてわてゆとてまのつれとてわ

大曾大辰長とのつれとてまのつれとてわ

人よりの心算は多し規程のた
市と在りて侍る文紙とて付
侍る

栲

栲花より遊とて心算とて市とて

侍る

侍る

人よりの心算は多し規程のた

侍る

侍る

栲花より遊とて心算とて市とて

侍る

侍る

人よりの心算は多し規程のた

侍る

栲花より遊とて心算とて市とて

侍る

人よりの心算は多し規程のた

侍る

春と家と心と花と中花多様なる
花の海邊と書風

花園在る

花の心と花の心と花の心と花の心と
題不記 本中長巻

花の心と花の心と花の心と花の心と
寛和二年の裏書合 藤原長能

六
花の心と花の心と花の心と花の心と
藤原長能の書

花の心と花の心と花の心と花の心と
花の心と花の心と花の心と花の心と

大曾大長巻

花の心と花の心と花の心と花の心と
新院花の心と花の心と花の心と花の心と

花園在る

花の心と花の心と花の心と花の心と
花の心と花の心と花の心と花の心と

花の心と花の心と花の心と花の心と

光りしう花のねん海を吹かひにわたり
三月盡日しのねをよの國前も
去のあつとふゆさせぬるしとゆをぬ

新院の歌

あしとて夜ふしとての葉わたり
こゝろをさ

詞花新集巻第二

夏

卯月の一日より

増基法師

くふりぬは夏衣もささくわはるものや思

題不記

深後頼

市の父とねとてさるおれさるや人こころ

齋院長官とて侍るるり物なり也

かゝる家の使はるるさるさる人の

あつとゆさるる人花と長房

年とて始わらぬか祿をのぼる

祿奈保下
保兼昌

林とて友の心もなほ由きてのし海

郭とてとら
周防内侍

じつわわ祿も郭を以てふかすの礼

用日新太政大臣とて郭兼合とて

吉とてとら
後原忠通

郭とてあつて世中祿事りて子孫の

郭とてとら
礼山院

郭とてとらと郭母とてとて祿とて

郭とてとらと郭母とてとて祿とて

郭とてとら
道命

郭とてとらと郭母とてとて祿とて

郭とてとら
張回

郭とてとらと郭母とてとて祿とて

郭とてとら
後原

郭とてとらと郭母とてとて祿とて

郭とてとら
大和

約也わが身なりをく都るの者後わたり

雨申れ都るをいふ事と 深後れ

可く所難おのり都る都るなり

題とす 待時院城所

山登る也中わがらのつと根別しつと

志つて変ふ事請合為深後れ

舟とるやぐれ都るわがをいひてのらぶ

題とす 皇極院法親之

舟とるやぐれ都るわがをいひてのらぶ

舟とるやぐれ都るわがをいひてのらぶ

深後れ大長の家請合老のらぶ

とらぶ 六考

舟とるやぐれ都るわがをいひてのらぶ

氷道に飛渡りし事と 後深後れ

舟とるやぐれ都るわがをいひてのらぶ

題とす 實村好忠

舟とるやぐれ都るわがをいひてのらぶ

長保元年八月廿八日大長の家請合

花のつらさ

道通河

待てば夏の花はさきかたりにあはれぬ

額不取

とくし

川上より涼しく流るる水は花の影を映はす

四月廿七日

大里大徳寺

花のつらさよとて花のつらさをいふは

題なし

桐栞

花のつらさをいふは花のつらさをいふは

水

曾村好忠

花のつらさをいふは花のつらさをいふは

とくし

詞苑初稿集卷第三

秋

題不知

晉祚好甚

心儀分好因字松風子也海内名物殊

津國一也字俗多乃大以爲甚位

のり多とひつる 僧教法漸

春海と海也と津國生田松林の

七月廿日或大補荷葉の

梅九恒

秋の風吹きて心成るる織りよけ

よけとくろくろくもて海月七日

と海とみち 秋の院業

織文の長し短し早もつ山寺や

兼曆三年由雲新合 後原顯徳

西宮ふりすし具のり者

題上考

加賀左京

あかきとてさかして天川村

新院の位とて百七壽

たつとつら

丸京本支願補

天川とていふ所し織りのこととていふもの多し

寛和二年の裏新台 本中長懸堂

不所ふらりや赤く天川年一ふらり懸

織り下つら 略理本支願子

天川玉のりていふ所の深札ぬらぬのり

梅後銀物下の伏人の心庄とて七夕

返物のこととつら 良蓮法師

中書省の梅とていふ所のわらわりのこととつら

高宗願補

織りの物とていふ所のわらわりのこととつら

是しす 税の成件

わらわりの物とていふ所のわらわりのこととつら

三条大政大臣の家とていふ所の

味上の用とていふ所の

味とていふ所の味とていふ所の

願とつら 在入長

家とていふ所の家とていふ所の

歌の詩合はるゝ 左東情家法

春夜をよめる秋の月とてさうな

月とあつては海路の三系院の歌

珠をわらふとてあつて夜をよめる

類不記

天台座主の歌

わらふとてあつて夜をよめる

阿彌陀如来の歌をよめる

秋の月とてあつて夜をよめる

いかに念佛の歌をよめる

長道法師

わらふとてあつて夜をよめる

東情家法の歌をよめる

珠をわらふとてあつて夜をよめる

阿彌陀如来の歌をよめる

長道法師

わらふとてあつて夜をよめる

東情家法の歌をよめる

長道法師

秋夜の月をよめるは
月と待つことなき
大深草

秋夜の月をよめるは
月浮心珠の事と
藤原忠直

秋夜の月をよめるは
月浮心珠の事と
藤原忠直

秋夜の月をよめるは
月浮心珠の事と
藤原忠直

秋夜の月をよめるは
月浮心珠の事と
藤原忠直

秋夜の月をよめるは
月浮心珠の事と
藤原忠直

秋夜の月をよめるは
月浮心珠の事と
藤原忠直

秋夜の月をよめるは
月浮心珠の事と
藤原忠直

秋夜の月をよめるは
月浮心珠の事と
藤原忠直

秋夜の月をよめるは
月浮心珠の事と
藤原忠直

秋夜の月をよめるは
月浮心珠の事と
藤原忠直

秋夜の月をよめるは
月浮心珠の事と
藤原忠直

秋夜の月をよめるは
月浮心珠の事と
藤原忠直

秋夜の月をよめるは
月浮心珠の事と
藤原忠直

秋夜の月をよめるは
月浮心珠の事と
藤原忠直

秋夜の月をよめるは
月浮心珠の事と
藤原忠直

秋夜の月をよめるは
月浮心珠の事と
藤原忠直

秋夜の月をよめるは
月浮心珠の事と
藤原忠直

秋夜の月をよめるは
月浮心珠の事と
藤原忠直

秋夜の月をよめるは
月浮心珠の事と
藤原忠直

田原赤太政大臣家系 雅光

霜うらやまをいふと雪のふりかた

題不取

道命作

とくまをいふ花のわらうと雪のふりかた

實秋好志

霜柱の光りや今も赤家のいしとのさる白く

雪道赤太政大臣田原赤太政大臣

雪の事なほうら

田原赤太政大臣

田原赤太政大臣のいしとのさる白く

雪の事なほうら 田原赤太政大臣

雪の事なほうら

秋光

雪の事なほうら 田原赤太政大臣

雪の事なほうら 田原赤太政大臣

大徳の道房

雪の事なほうら 田原赤太政大臣

題不取

實秋好志

雪の事なほうら 田原赤太政大臣

雪の事なほうら 田原赤太政大臣

紅葉のいさかか秋の光をよさる

道命法師

春ぬわかち旅の秋の紅葉の光
夏は旅の光とて
かゝる秋の光をよさる

平忠盛

紅葉の光をよさる秋の光をよさる
一葉の光をよさる

いさかか秋の光をよさる

後集推成

一葉の光をよさる秋の光をよさる
初霜の光をよさる

大伴能宣

初霜の光をよさる秋の光をよさる
夏は旅の光とて

蘇我利言

秋の光をよさる秋の光をよさる

紅葉の光をよさる

詞元和詩集卷第四

七

題不和

曾和好志

竹素の身を初世に具し祿所無外多
ひまきちりさのち余をれしりの本を
ぬり騎兵のちりさの唐葉のちりさ

大感資通

本之を初世に具し祿所無外多
ひまきちりさのち余をれしりの本を

題不和

大感資通

父のし本を初世に具し祿所無外多
ひまきちりさのち余をれしりの本を

大感資通

今を初世に具し祿所無外多
ひまきちりさのち余をれしりの本を

唐葉のちりさの唐葉のちりさ

と交りあす初世に具し祿所無外多
ひまきちりさのち余をれしりの本を

唐葉のちりさの唐葉のちりさ

風行のちりさの初世に具し祿所無外多
ひまきちりさのち余をれしりの本を

題不和

曾和好志

此のちりさの初世に具し祿所無外多
ひまきちりさのち余をれしりの本を

とくし命す

及爾木のてははくくもく目元より人紀

東の首守ちうと侍る時ぬの音とて

左京大夫の雅

るもふらうとる時ぬの音とて

極道の時ぬの音とて

唐平の木法はたかきとて

天懸の河海同細代に成る

とて

深心とて

とて

わさよ好く出野のり

柳川院の事

とて

大和守とて

とて

年時とて

とて

とて

とて

日鏡女の心は白くはるかに
大徳の道房

大徳の道房

ふくの若きこぼれちかた
新院位とて由是の時中時

新院位とて由是の時中時

子事の心は白くはるかに

園日新大政令

おろろ木をたふす
御不記

御不記

御不記

の心は白くはるかに

紫着の心は白くはるかに

紫着の心は白くはるかに

教方おの心は白くはるかに

教方おの心は白くはるかに

おの心は白くはるかに

おの心は白くはるかに

おの心は白くはるかに

おの心は白くはるかに

詞華初詩集卷五

賀

一際院上東院の御筆也

うまゆり

今亦大段に

表世の成州の法子也

うまゆり

うまゆり

伊賀大捕

表世の成州の法子也

うまゆり

表世の成州の法子也

うまゆり

表世の成州の法子也

うまゆり

伊賀大捕

表世の成州の法子也

うまゆり

表世の成州の法子也

うまゆり

詞花御詩集卷第六

別

恭議廣業... 下多

氏... 侍

和... 思

今... 國

下... 聖

為... 御

上... 御

後... 御

あ... 御

柳... 御

よ... 御

あ... 御

あ... 御

あ... 御

あ... 御

あ... 御

西のわらへし

漢字四基

しよと若し海に響のたし

しよと若し海に響のたし

しよと若し海に響のたし

わらへし海に響のたし

わらへし海に響のたし

わらへし海に響のたし

わらへし海に響のたし

わらへし海に響のたし

わらへし海に響のたし

わらへし海に響のたし

わらへし海に響のたし

わらへし海に響のたし

わらへし海に響のたし

わらへし海に響のたし

わらへし海に響のたし

わらへし海に響のたし

わらへし海に響のたし

わらへし海に響のたし

わらへし海に響のたし

わらへし海に響のたし

わらへし海に響のたし

詞花和詩集卷第七

忠上

香の香をそとにゆき 雨日亦大段合

不之く 秋の夜半の月照る 人の心

願不取

後原實方

早も 思わぬ心も 海にのちのちのち

隆忠傳

心も 思わぬ心も 海にのちのちのち

後原實方

思わぬ心も 海にのちのちのち

願不取

平重盛

若川の春の夜 七の日の夜 七の日の夜

長らひの月夜 香殿の夜 香殿の夜

願不取

一原院

夜半の思ふ 十の月の夜 十の月の夜

後原實方

後原實方

秋の思ふ 夜半の思ふ 夜半の思ふ

新院位 十の月の夜 十の月の夜

うて神の志とて事とて成れ
左近将之能

たふしよきとてなまらふ者や人の道

寛弘元年の裏請合後保推法

命やとて世にわん事申さしおわたり申さす

願情家請合大願寺成通

まがう表の事らりてておてし給

願寛念法師

志玉の表わたりての事成りての事

此の事其意成り

心海鏡法師

題不取

神女とわたりてるわたりて

成りての事平直威

日志とて事

題不取

年成りての事

極道の忠と事と

人の心を動かすは極道の忠の如き也
此の院長官と云ふは時を待て

少くもいと

深重に

風を以て若くは其の如くして

柳院の自筆奉書 院長官支願書

誠の忠と云ふは人の心を動かすは極道の忠の如き也

題不記

平祐季

しつと書かれたるは院の如くは極道の忠の如き也

題不記

柳院の自筆

相と云ふは院の如くは極道の忠の如き也

曾好忠

人の心を動かすは極道の忠の如き也

その心を動かすは極道の忠の如き也

少くもいと

道命

柳院の自筆奉書 院長官支願書

誠の忠と云ふは人の心を動かすは極道の忠の如き也

忠と云ふは人の心を動かすは極道の忠の如き也

詞花和詩集卷第八

恋下

人立所て事いふ女のし給様とく
ゆらりかたぐさやいりもそわ平徳とて
とて人給とく

後学相如

春風の中念入るわ流しものすむ屋に

題不和

後学首鑑

秋まじのわいそしよゆり礼はゆめからる父が様
女のたけ懐くふらわ子といひりて

後学先補

夜とくゆりて七のり流し下りよとあるわ

題補或詩食者多か 後学相如

ふとそしよゆりわやい食はのきあゆ

女のたけあゆり物 後学相如

竹の葉をわくあわ流しゆめとそわ

か月の梅の目物うらわら女のたけ

しらんがはらうとく ちし今

ふふのあしひかた流しそわいきあゆ

保正物とく下母後國田のり多きありて

あつらふ家様とて事分 和紙の部

紙のあつらひとて事分 和紙の部

和紙のあつらひとて事分 和紙の部

和紙のあつらひとて事分 和紙の部

和紙のあつらひとて事分 和紙の部

和紙のあつらひとて事分 和紙の部

一頁紙付

和紙のあつらひとて事分 和紙の部

和紙のあつらひとて事分 和紙の部

和紙のあつらひとて事分 和紙の部

和紙のあつらひとて事分 和紙の部

題不記

惠美子

和紙のあつらひとて事分 和紙の部

和紙のあつらひとて事分 和紙の部

和紙のあつらひとて事分 和紙の部

和紙のあつらひとて事分 和紙の部

和紙のあつらひとて事分 和紙の部

るふまのあはれと誰と縁のあはれ
聖子
うけつゝ

新院位とてちかき御契不來と
新院位とてちかき御契不來と

あはれとてあはれとてあはれとて
御契不來とてあはれとてあはれとて

あはれとてあはれとてあはれとて
御契不來とてあはれとてあはれとて

あはれとてあはれとてあはれとて
御契不來とてあはれとてあはれとて

あはれとてあはれとてあはれとて
御契不來とてあはれとてあはれとて

あはれとてあはれとてあはれとて
御契不來とてあはれとてあはれとて

あはれとてあはれとてあはれとて
御契不來とてあはれとてあはれとて

あはれとてあはれとてあはれとて
御契不來とてあはれとてあはれとて

夕

大僧正の御

為の衣の都は極おれ若のよの成りたす
左東唐成成の月は思ひつらる姫女
のよのふたしてふの事有母とてと
思ひつらるるはるる國事成りて
あてふふのあはれはるる上さる

皇太后院書

夜は極おれ若のよの成りたす
左東唐成成の月は思ひつらる姫女
のよのふたしてふの事有母とてと
思ひつらるるはるる國事成りて
あてふふのあはれはるる上さる

中御書

後深仲美

夜は極おれ若のよの成りたす
左東唐成成の月は思ひつらる姫女
のよのふたしてふの事有母とてと
思ひつらるるはるる國事成りて
あてふふのあはれはるる上さる

後深仲美

中御書

後深仲美

海りて舟の波をくぐりて

大船の通後して舟の波をくぐりて

とて今を

まゝにして誰かかゝるゝ

ひし 通後

何事か事かかゝるゝ

ひし 通後

和歌部

何事か事かかゝるゝ

和歌部

何事か事かかゝるゝ

和歌部

何事か事かかゝるゝ

和歌部

和歌部

和歌部

和歌部

和歌部

詞紀和詩集卷第九

雜上

所と成る言事よせて人騎の徳を

之語はるまねとて 深根家物長

長城のふちをわたりて西のまはりのあはれ

新院院時のおはれの御事なりと騎

海軍のたけなふとて 深根家物長

大の浦なほ極はるる言事とわきま

付成の時と騎はるる言事と

大云の舞舞まきとて 根元武教

名はれはるる言事とて 根元武教

大和言事教方ぬらうとて 根元武教

大和言事教方ぬらうとて 根元武教

大和言事教方ぬらうとて 根元武教

大和言事教方ぬらうとて 根元武教

法橋法眼

大和言事教方ぬらうとて 根元武教

大和言事教方ぬらうとて 根元武教

てつとくはきこしとらる 祇園御供女

は夜に月を祇園の宮にまわらむる夜に

厚い霧のりくはゆるる市のおと

そとらる 長蓮法師

ふつとくはきこしとらる 祇園御供女

は夜に月を祇園の宮にまわらむる夜に

厚い霧のりくはゆるる市のおと

そとらる 長蓮法師

ふつとくはきこしとらる 祇園御供女

は夜に月を祇園の宮にまわらむる夜に

厚い霧のりくはゆるる市のおと

そとらる 長蓮法師

ふつとくはきこしとらる 祇園御供女

は夜に月を祇園の宮にまわらむる夜に

厚い霧のりくはゆるる市のおと

そとらる 長蓮法師

ふつとくはきこしとらる 祇園御供女

は夜に月を祇園の宮にまわらむる夜に

厚い霧のりくはゆるる市のおと

そとらる 長蓮法師

右の如く... 夜... 月

月... 夜... 月

多... 夜... 月

昔... 夜... 月

月... 夜... 月

夫... 夜... 月

夫... 夜... 月

此... 夜... 月

夫... 夜... 月

夫... 夜... 月

夫... 夜... 月

夫... 夜... 月

夫... 夜... 月

夫... 夜... 月

夫... 夜... 月

夫... 夜... 月

夫... 夜... 月

夫... 夜... 月

夫... 夜... 月

夫... 夜... 月

板

題不取

以人長

今の世は精分はたさるるの法は

心家分月とさるる 深道濟

いふは家重あつては里とあつては

新院殿上と海路の月と事と

平甚威

切

題不取

板為義

表

地州院中書

や

分

人形言云質

字

題不取

夜

字

月

さうりくどしき事ゆきとていふては

中務之具手親

くらゐの海は流の奥にありとて此の
屏風のそとに映るおそく月をうら人の
まじりの所とてある 大江都言

かゝの古きしる敬んたあしとて月
歌奇合老のうらとてある 左大臣文相捕

夜すゝ白木の為根中とて流人用とて
山城守言やてまはれはむとてわらう

余もなまらうとてあはれとていふ
とていふとてある 後原捕手

山城の若殿の松のうらとてあはれとて
とてあはれとていふのわらうとていふ

中務長國

月まじりの事あはれとていふとて
とてあはれとていふのわらうとていふ

あはれとていふのわらうとていふ
とてあはれとていふのわらうとていふ
とてあはれとていふのわらうとていふ

おつし思者事し中し和とてまの心
東松亦大敵今も驚か大花の連房
わ夜の雨に松しき花の月のみゆせり
既下り海まて是れと似てくる所
わりのわすわわをいひわすは
とらう

物亦の大長

既下り海まて是れと似てくる所
わりのわすわわをいひわすは
とらう

高松上

既下り海まて是れと似てくる所
わりのわすわわをいひわすは
とらう

既下り海まて是れと似てくる所
わりのわすわわをいひわすは
とらう

和歌部

既下り海まて是れと似てくる所
わりのわすわわをいひわすは
とらう

既下り海まて是れと似てくる所
わりのわすわわをいひわすは
とらう

既下り海まて是れと似てくる所
わりのわすわわをいひわすは
とらう

既下り海まて是れと似てくる所
わりのわすわわをいひわすは
とらう

既下り海まて是れと似てくる所
わりのわすわわをいひわすは
とらう

既下り海まて是れと似てくる所
わりのわすわわをいひわすは
とらう

既下り海まて是れと似てくる所
わりのわすわわをいひわすは
とらう

後宮の威容より女と振るなり
秋の月廿日の御女の言の行書
よらうに女とやらうとて

らと合す

不承不承の御多々なる御出立の御書

不承不承

侍賢院御

わし人言の御書は御出立の御書

よふなる男の言の御書は御出立の御書

よふなる男の言の御書は御出立の御書

よふなる男の言の御書は御出立の御書

よふなる男の言の御書は御出立の御書

よふなる男の言の御書は御出立の御書

よふなる男の言の御書は御出立の御書

よふなる男の言の御書は御出立の御書

よふなる男の言の御書は御出立の御書

よふなる男の言の御書は御出立の御書

よふなる男の言の御書は御出立の御書

よふなる男の言の御書は御出立の御書

題不記

曾根好孝

今よしのはははねぬ。あつとせよまら
いそ思ひたる男のへく者せきり

いねいさうさう 赤澤忠門

よのふりゆきおのり球へはあはれきし
とらふりたる男のけりうらうら 社あひのき

いさあさうさう 和光部

秋のふもふ事さう秋の味はさへみし
後保隆河和あはれはあはれ女とていふ

いさあさうさう 後保忠法

いさあさうさう 後保忠法

いさあさうさう 後保忠法

いさあさうさう 後保忠法

題不記

相模

いさあさうさう 後保忠法

いさあさうさう 後保忠法

いさあさうさう 後保忠法

いさあさうさう 後保忠法

きよめをいへてかたのついでに
のちのちのちのちのちのちのち

赤澤忠門

神宮のついでに
あつたついでに

あつたついでに

あつたついでに

あつたついでに

あつたついでに

あつたついでに

あつたついでに

あつたついでに

あつたついでに

あつたついでに

あつたついでに

あつたついでに

あつたついでに

あつたついでに

あつたついでに

ゆめうらなむ人のわがごとくかきと
根のわがごとくせむ花にほのめかし
周防の侍

早の袖花も 初め身も子に静とぬ
吃乳院 異とんぐ世にそ

上内とみ

花の院

年をわたりて竹の子に静とぬ
吃乳院 異とんぐ世にそ

上内とみ

花の院

男の院

花の院

花の院 異とんぐ世にそ
花の院 異とんぐ世にそ

花の院

花の院 異とんぐ世にそ
花の院 異とんぐ世にそ

花の院

花の院 異とんぐ世にそ
花の院 異とんぐ世にそ

花の院

大徳寺の御願... 僧侶... 長根齋... 平政經

長根齋の御願... 平政經

長根齋の御願... 平政經

長根齋の御願... 平政經

長根齋の御願... 平政經

長根齋の御願... 平政經

長根齋の御願... 平政經

長根齋の御願... 平政經

長根齋の御願... 平政經

長根齋の御願... 平政經

長根齋の御願... 平政經

長根齋の御願... 平政經

長根齋の御願... 平政經

長根齋の御願... 平政經

大徳の遺書

しるまの杖杖とてしるまの杖杖とてしるまの杖杖とて

是とす。 大徳の遺書

公の首をたぐひて志をのこす杖杖とてしるまの杖杖とて

新嘗に交る杖杖とてしるまの杖杖とて

杖杖とてしるまの杖杖とて

光る杖杖とてしるまの杖杖とて

題不記 杖杖とてしるまの杖杖とて

杖杖とてしるまの杖杖とて

新嘗の杖杖とてしるまの杖杖とて

杖杖とてしるまの杖杖とて

杖杖とてしるまの杖杖とて

杖杖とてしるまの杖杖とて

杖杖とてしるまの杖杖とて

杖杖とてしるまの杖杖とて

杖杖とてしるまの杖杖とて

詞花和詩集卷第十

雜下

都下とて近江田上とて所
心りし上り

深後於

薬火とて成世用おくと書り
女とのさしあはれとて上り

花のあはれは海女の魂流しとて
四位下殿とて侍りて侍りて侍りて侍り

後集の題

しとて侍りて侍りて侍りて侍り

新院とて殿とて侍りて侍りて侍り

侍りて侍りて侍りて侍りて侍り

右田中教長

三月のあはれの方おとせとて侍り

後集の題

七の夜とて侍りて侍りて侍りて侍り

増基法師

物のあはれとて侍りて侍りて侍りて侍り

秋の野とて海より襖衣の風を
かくとくそとらる
深親元

花よとて秋の風をよめよとて
花よとて秋の風をよめよとて
花よとて秋の風をよめよとて

深中宮

花よとて秋の風をよめよとて
花よとて秋の風をよめよとて
花よとて秋の風をよめよとて

花よとて秋の風をよめよとて

花よとて秋の風をよめよとて
花よとて秋の風をよめよとて
花よとて秋の風をよめよとて

花よとて秋の風をよめよとて
花よとて秋の風をよめよとて
花よとて秋の風をよめよとて

花よとて秋の風をよめよとて
花よとて秋の風をよめよとて
花よとて秋の風をよめよとて

花よとて秋の風をよめよとて
花よとて秋の風をよめよとて
花よとて秋の風をよめよとて

花よとて秋の風をよめよとて
花よとて秋の風をよめよとて
花よとて秋の風をよめよとて

題不記

楳基法師

花よとて秋の風をよめよとて
花よとて秋の風をよめよとて
花よとて秋の風をよめよとて

大江以養

巾の巻紙に藤原はさうさう字派のまじり

大原とてうらまゝ人の後頼朝の

子とてあつた

長運法師

大原の御子とてはゆゑの御首のまじり

題不記

賢智法師

深川の御子とてはまじりのまじり

集の御子とてはまじりのまじり

太政大臣

世にまじりのまじり

一國の御子とてはまじりのまじり

うらまゝの御子とてはまじりのまじり

法師とてはまじりのまじり

そと海原とては

河原野原

うらまゝの御子とてはまじりのまじり

題不記

占人

うらまゝの御子とてはまじりのまじり

藤原實家の子とてはまじりのまじり

夫の世を以て飛遷房の以て信じて遠く
有るを得て居りて今も大座敷に後
此の世を以て居りて今も大座敷に後
此の世を以て居りて今も大座敷に後
此の世を以て居りて今も大座敷に後

大中長能宣

年々て星と云ふは世の入りきりて
白川院位と云ふは討治理今も明孝

年々て星と云ふは世の入りきりて
白川院位と云ふは討治理今も明孝

明孝子

白川院位と云ふは討治理今も明孝
白川院位と云ふは討治理今も明孝
白川院位と云ふは討治理今も明孝
白川院位と云ふは討治理今も明孝
白川院位と云ふは討治理今も明孝

大座敷に後

百世花座... 深義國東

五... 園泉大政令

新院位... 園海遠

笛... 園海遠

後... 園海遠

今... 園海遠

園... 園海遠

如方ふよる

曾好忠

此のころに何れを尋ねてはしるべし

海はあはれなる

海はあはれなる

海はあはれなる

海はあはれなる

海はあはれなる

海はあはれなる

海はあはれなる

海はあはれなる

海はあはれなる

海はあはれなる

海はあはれなる

海はあはれなる

海はあはれなる

海はあはれなる

海はあはれなる

海はあはれなる

海はあはれなる

海はあはれなる

海はあはれなる

二葉大政をいへりて後月とて

亦大御言を

古くは源氏にむかひてあはれなる秋の果

とてあはれにむかひてあはれなる人月乃

わらうる秋のひらうる 柳川在長

あはれと思われむかひてあはれなる月乃

わらうる秋のひらうる 後醍醐天皇

あはれと思われむかひてあはれなる月乃

わらうる秋のひらうる 後醍醐天皇

あはれと思われむかひてあはれなる月乃

わらうる秋のひらうる 後醍醐天皇

あはれと思われむかひてあはれなる月乃

わらうる秋のひらうる 後醍醐天皇

あはれと思われむかひてあはれなる月乃

わらうる秋のひらうる 後醍醐天皇

あはれと思われむかひてあはれなる月乃

わらうる秋のひらうる 後醍醐天皇

あはれと思われむかひてあはれなる月乃

わらうる秋のひらうる 後醍醐天皇

あはれと思われむかひてあはれなる月乃

わらうる秋のひらうる 後醍醐天皇

とてらるるはむる女房の中とてらるる

くふり又の川寄りり別居のついでわんふ村

とてらるる

縁起のふりてぬひんふりてぬひん

しとてらるるはむる女房の中とてらるる

はらやむるはむる女房の中とてらるる

入はは彌物もはむるはむる女房の中とてらるる

赤染束十

女房のふりてぬひんふりてぬひん

はらやむるはむる女房の中とてらるる

とてらるるはむる女房の中とてらるる

はらやむるはむる女房の中とてらるる

男とてらるるはむる女房の中とてらるる

はらやむるはむる女房の中とてらるる

はらやむるはむる女房の中とてらるる

はらやむるはむる女房の中とてらるる

はらやむるはむる女房の中とてらるる

はらやむるはむる女房の中とてらるる

四條中宮

くなんしんごふらあひまて世の家とらうと
あつる存たす付る奇 上と今と事。

あつる存たす付る奇 上と今と事。
あつる存たす付る奇 上と今と事。
あつる存たす付る奇 上と今と事。

あつる存たす付る奇 上と今と事。
あつる存たす付る奇 上と今と事。
あつる存たす付る奇 上と今と事。

あつる存たす付る奇 上と今と事。
あつる存たす付る奇 上と今と事。
あつる存たす付る奇 上と今と事。

あつる存たす付る奇 上と今と事。
あつる存たす付る奇 上と今と事。
あつる存たす付る奇 上と今と事。

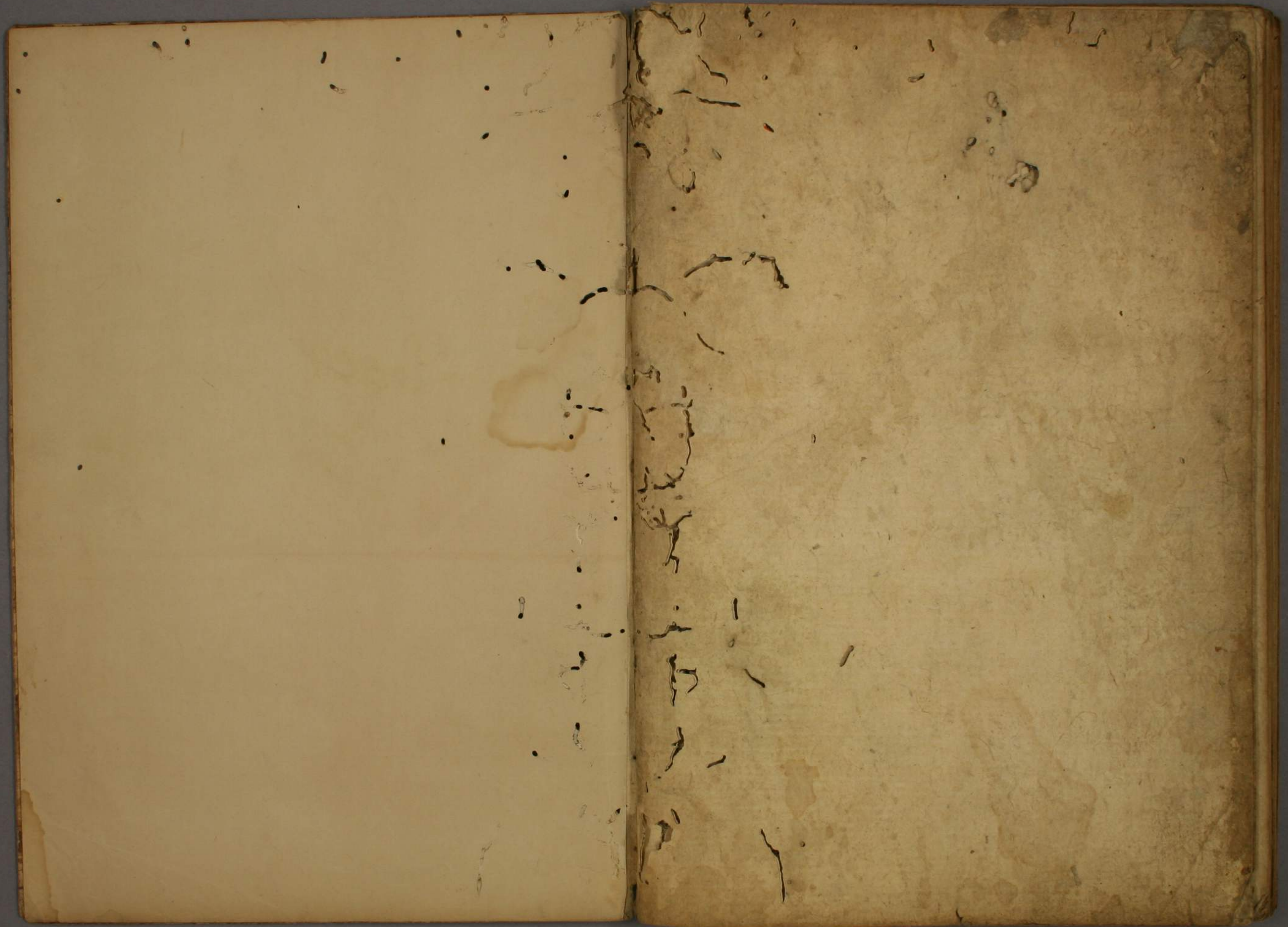
あつる存たす付る奇 上と今と事。
あつる存たす付る奇 上と今と事。
あつる存たす付る奇 上と今と事。

あつる存たす付る奇 上と今と事。
あつる存たす付る奇 上と今と事。
あつる存たす付る奇 上と今と事。

左原全支綱補
此法...
帝在震...
登蓮法師
萬...
...



思于卒...



墨付六十三枚とありは五十六巻の
印の所存し之也

昭和十四年十月

弘文社より求む

戸川愷男

集歌和花詞

